



## 箱根駅伝、圧勝の青山学院大 その強さの秘訣とは？

～原監督の目指す「強いチーム作り」～



### サラリーマンから駅伝監督に

3年契約で就任した原晋監督が率いた青山学院大学陸上競技部は最初の予選会で16位、翌年は13位、その翌年は16位という結果に終わり、3年続けて本選出場を果たすことはできませんでした。

何とか契約延長になった原監督が考え直したのはスカウティングの方向性でした。

最初は人間性を重視してスカウティングしていましたが、「結果を出したい」というラストイヤーには、人間性は後回しにし記録優先でスカウティングをしていたのです。

その結果態度の悪い選手が寮のルールも守らず、周りに悪影響を与えるようになり、そのうち実力のある新入生たちがどんどん辞めていきました。

その結果、前年の13位から順位を落とすこととなったのです。

### 選手である以前に 社会人として育てる

『組織というものは、ベースにはちゃんと組織としてのルールがあって、その上に自由な発想というのが乗ってくるものだと考えています。最初からすべての自由を与えてしまったら、それは単なる緩い組織となり、組織として重要な土台がしっかりできない。』

ですからまずはベースづくりには時間をかけました。特に陸上はタイムで管理される世界ですから、集合時間などは1秒単位までうるさいですよ。

そういう組織で育たないと、大学を出た後に一選手ではなく、一社会人として彼らが困るだろうなという気持ちもあった。つまり、基本的なルールが守れなかったり、自分で発想できなかつたりしたら、選手以前に、一社会人としてダメですから』

と語る原監督は、技術的な指導

だけではなく、もっと先を見据えた人間性を重視した指導をされています。その結果がこの圧倒的に強いチームを作ることとなったのです。

### 上司の命令をハイハイ 聞く社会人にはしたくない

青山学院大学陸上競技部で育った部員は、ただ上司の言うことをハイハイと聞くような社会人にはしたくないという思いから、原監督は日頃からコミュニケーションを重視しています。

『特に箱根駅伝の常連校になると、監督がいてコーチがいてマネージャーがいて、全部がシステムティックに動いていて、選手たちはただ走るだけが仕事というような組織になっている傾向があるんです。』

でもそんな環境で四年間を過ごしてしまった人間は、果たして会社に入ってからどうなのか。だからそれを変えたいという思いもあるんです。

るんです。

目標管理ミーティングなどで、コミュニケーションをとることを指導ノウハウの軸にしているのにはそうした意味があります。

『そうしないと陸上部引退後に会社に入って、コミュニケーション能力のない奴は、出世できません』

そのような組織だと、マネージャーなどの学生スタッフにも主体的が生まれてくるようです。

『できないマネージャーは「今日の練習どうしましょう」とただ訊いてくる。できるマネージャーは「今日の練習は〇〇ですけど、ちょっと暑いので一時間ずらしましょうか？」と提案してくる。』

自分の中で選択肢を持たないでただ訊いてくるマネージャーに対しては、「君はどうしたいの？」と訊き返します』

この「相手から答えが出てくるのを待つ」ということが、一般社会の上司でも、我が子に対する親でも、指導者でも出来ていない人が多いと原監督は言います。

### すべきことはしつつ 「楽観的に」が大切

そして忘れてはいけない大事なことは、何事に対しても最後は「なんとかなるさ」と楽観的であってほしいということです。

『私が見てきた陸上選手は本当に努力しています。自己ベストを更新しようと必死に練習していま

す。そこまで努力しても、レース本番で結果が出ないことは多々あります。』

私はそこまで努力したなら、結果は負けても、負けだとは思いません。私が考える負けの基準は、努力しなかった負け、これだけです。』

本人がやりきった結果であれば、たとえ、そのレースで負けたとしても、続きがあるはずですよ。』

だからこそ、最後はなんとかなるさの精神が大事なのです。明るく元気に努力して、最後は「なんとかなるさ」で楽観的に構える。』

そうすれば、なにかに行き詰まることもなく、組織も個人も伸び続けていけるはずですよ。』

### MACでも同じ思いで 日々指導しています

大学生相手と、幼児～中学生相手なので当然のことながらレベルは違いますが、生徒を指導する際の考え方はMACと通ずる部分が多分に多くありました。

MACの小学部では小1～小6まで無学年で、一つの教室で学びます。

約80分の授業の中には5～10分程度、上級生が下級生に漢字を教えたりと、学年の垣根を越え学び合っています。また、指導者が上、生徒が下という関係性ではなく、あくまで生徒の自学自習を支えるサポーターのような位置を意識しています（当然放ったらかし

ではなく問題の解き方は指導しますし、注意が必要な時は厳しく注意することもあります）

指導する側が一方的に、強制的にやらせれば、その瞬間はちゃんとするのですが、長期的に自主性を持って行動出来るようにはなりません。』

その子その子に合った、「こうすれば自ら動いてくれるだろう」という声かけを探りながら、実践しています。』

中学部になれば、各自テスト2週間前から細かい学習計画を立ててもらい、それに従って学習を進めます。そしてテストが終われば学習計画とテスト結果を見返し、次回の学習計画を立てる際の参考にすると、ということを繰り返してもらいます。』

これを繰り返すことで「自分に合った勉強法や勉強時間（量）」を自分自身で把握することができます。』

弱小駅伝部を強豪校に育てた原監督の指導法と同じような指導法を小・中学生にしているのですから、なかなかうまくいかないことも多いでしょう。すぐには目に見える成果が無いかもしれません。』

しかし大切なのは「相手から答えが出てくるのを待つ」ことでしたね。何事も結果・成果を求めすぎると子どもは潰れます。親の過度な期待で我が子を潰さないよう、まずはこの1年「じっくり待つ」訓練をしてみてくださいね。』